
もう一つの世界は・・・

海星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

もう一つの世界は・・・

【Nコード】

N1146L

【作者名】

海星

【あらすじ】

ある本を見つけた、神田勇鬼 17歳 はその本を読もうとしたが、字がまったくわからなく、絵しか分からない。そしてあるメモを見つける。そしてなぜか知らないがもう一つの世界に飛ばされた。町は、自分のいた世界と同じのような建物。だが性格や字がまったくちがう。なにが起こるかもわかっていない勇鬼に恐怖が襲う。そしてその本に書いてあった内容とは？

何かがおかしい？（前書き）

初投稿です。文章を書く力は無いと思いますが、がんばって書いてみます。

何かがおかしい？

ここは平和な町

俺の名前は 神田勇鬼 17歳。ごく普通の高校生。

俺はいつもどおりの道で下校をした。球磨亜公園にある 生け贄の像 の前をいつも通っている。

訳はない。そして生け贄の像を通り過ぎようとした時・・・

コツツ 俺は何かにつまずいた。それは本だった。本の題名は分からない。見たことの無い字で書いてあった。本を開いて読んでみた。でもやっぱり見たことのない字で書いてあり、分かるのは、絵のみ。戦争の絵や、怪物の絵や何かから逃げている絵など変な絵ばかり描いてあった。

パラパラとめくって見ていると、一つのメモが出てきた。

こんなことが書いてあった。『お前はこの世にいられない』

気味が悪くなり、本とメモを捨てて走って帰った。走っているとき、なぜか誰かからの視線を感じた。

俺は家に帰り、晩飯を食べて、ベットにころがった。あの気持ち悪いメモの事を思い出してしまった。

怖くなり、俺は目をとじた。

・・・まぶしい朝か？ 目を開けると、キラキラと輝く太陽の光が部屋の中にはいつている。

下が固い。下を見て見ると床。俺はベットから落ちたようだ。

今日は休み。俺はベットに戻り、再び寝ようと思った。

だが・・・俺は頭が真っ白になった。それは・・・

もう一人の俺がベットに寝ているからだ。意味が分からなくなり、手のふるえがとまらない。

俺は全力で家から飛び出した。すると近所のおばさんが散歩をしていた。

おばさんはすごく優しい。相談をしようと思った。

『おばさん』 おばさんは・・・『なんだい！！ 勇鬼か ちよつと邪魔』

え？ 僕は再び頭が真っ白になってしまった。

やっぱりなにかがおかしい。すると あのことを思い出した。

メモのことを思い出した。これとメモは何か関係があると思った。

何かがおかしい？（後書き）

どうでしたか？

僕はホントに書く力が無いんで心配です。

恐怖（前書き）

がんばって書いたのでみてください。

恐怖

俺は、意味も無く走った。もう頭の中がぐしゃぐしゃになって・

走っているといつのまにか夕方になっていた。そして球磨亜公園になぜかいた・・・

とにかくまっすぐに走っていたらこんなとこまできていた・・・

俺は 生け贄の像 の前にきた。

・・・俺は今生け贄の像の怪物が少し動いた・・・そんな気がした。俺は疲れてるんだろう・・・と思いい家に帰ろうとした。そのとき背後からの視線を感じた。昨日と同じような・・・

思い切つてふりかえってみると、黒く人のような・・・すると『キャシシシシ』と笑うような声が・・・そして

背中から何かが伸びている。黒く大きな翼が・・・俺はこれを見てあることを思い出した。

あの本に描いてあった、怪物の絵。この絵とすごく似ている。

すると怪物が『キャシシ・・・お前は俺らのためにキャシシシ・・・

・・・あの世行つてもらうよー』

鳥肌がたった。そして体がふるえている。きょう何回目だろう・

『うわああああ』俺は叫びながらにげた。すると怪物は翼をひろげて追つて来る。

俺はとにかく逃げた。商店街があつたから俺はそこに逃げた。

『怪物があ・・・怪物が追つて来る 助けてええ』俺は大きく叫んだ。

だが、人はこちらはむいてくれるが首を傾げていたり、ひそひそと俺の話をしているかんじ・・・

見えていないのか・・・ 余計に怖くなって商店街の近くにあった工場に逃げた。

ここなら見つからないだろうと思ったところに隠れた だが・・・
『キャシシシシ』 と笑う声が・・・ 俺は背後を見てみた。

だが何もいない。 俺は不思議に思い、上を見て見ると怪物が・・・
『なんで俺を・・・俺が死ななきゃ・・・』 恐る恐る聞いて見ると・・・

『お前には関係ない・・・ キャシシシシ・・・ さああの世いこうか・・・』

すると怪物の爪がのびてきた。 すごく鋭い 『キャシシシ・・・

バイバイ』

そしてすごい速さで接近してきた。 そして鋭い爪が顔の前に・・・
俺は本当にあの世にそう思った・・・。

恐怖（後書き）

どうでしたか？
これからもがんばりたいと思います

神登場？

すると………目の前が光につつまれた。

俺はまぶしくて目をつむった。目を開けると……

辺りが白い。さっきの怪物や、工場が消えていた。

俺は夢かと思つて、つねつてみたり自分で殴つてみたりしたが、何も変わらない。

俺は、辺りを見回してみた。すると……

『……うさぎ？』俺はつぶやいてしまった。俺の後ろにうさぎがいたからだ……

うさぎは毛は白く瞳はきれいな黄色に輝いている。そして爪がながく鋭い。そこが少し怖い……

するとうさぎが言った。『私はかわいいうさぎちゃんだよ』

声がひくい。かわいいうさぎちゃんだよってそんなひくい声で言われても……

『今のは冗談だ。俺は神だ！』神？なにをいつてるのかがさっぱり分からなかった。

『うさぎなのに神？笑わせるな』俺は笑いながら言った。すると怖い顔をしてうさぎは言った。

『そうか』するとうさぎが一瞬で俺の目の前まできた。まるで瞬間移動のようだ。そして俺の胸に小さな手を当て、なにかをした。

すると俺はまっすぐ後ろに吹き飛ばされた。俺は10秒ほど宙に浮いていた。するとうさぎがニコニコと笑いながら言った。

『だから言っただろ 俺は神だって 俺はなんでもできる。神だから』

俺は少しむかついた。俺はイラつきながら言った 『神がなんのようだよ！』すると神が

『お前は今怪物に追われてるだろ！』ゾクツとした。

またあのことを思い出して。するとうさぎが『俺が助けてやるよ。』

だから俺の言うことを聞け!!』

またまたむかついてしまった。すごく上から目線でむかついてしまふ。しかもうさぎに低い声で

言われると・・・ はっきりいつてキモい・・・

『今キモいと思っただろ』怖い顔で言ってきた。でもこいつ俺の思っていることがよめている。

本当にこいつは神なのか・・・ でも俺はこいつだ。

『俺はお前みたいなのうさぎに助けももらいたくねえよ。だから帰ってくれ』

『フツ』 笑うと同時に、うさぎと白い世界が消えた。そして前の世界に戻った。

でも怪物はいなかった。一気に全身の力が抜けた。

なんか変な世界きたし、怪物いるし、うさぎみたいな神がいるし。俺は疲れて寝てしまった。

神登場？（後書き）

ふうがんばりました

夢の中でも・・・

・・・ 戦争？

今僕の目の前で戦っている。　こんな今の軍事力ではありえないことだ・・・

しかも戦車も武器も誰一人もっていない。　なんか魔術のような攻撃で、攻撃している。

さらに一つの集団は、あの怪物。　怪物が、人間らしきやつらと戦っている。

でも、人間らしきやつも魔術のようなことで戦っている。

そして目の前で、そやつらが死んでいく・・・。　すごく怖い。

すると、怪物が俺の方向に手を開いて、ボソボソとしゃべっている。

まったく聞こえない。　脚に何かが絡まった。　長いひも状のものが、俺の脚に絡まっている。

すると、勝手に怪物のほうに引き寄せられた。　すると怪物の手の

ひらから、黒い半透明の球体が・・・

怪物がボソボソ再び話すと、手のひらにあった球体がこちらにむかって飛んでくる。

『ハッ』俺は思わず声をあげてしまった。　これは夢だったようだ。

俺は安心して、疲れて重くなった体を持ち上げるように立ち上がり、工場から外に出た。

『クウー』　腹の虫が鳴き始める。　俺は変な世界に来てから、何も食べてない。

だが金はない。　俺は、頭の中に　盗む　という文字が出てきたが、それを打ち消し、

歩き始めた。

俺は1時間ほど歩くと、近くににあった椅子に座り込んだ。

すると急に知らない男が俺の目の前に立った。　それと同時に腹の

虫が泣いた。

『腹が減ったか……。これやるよ』 知らない男は、ポケットの中から、コインを取り出し、地面に落とす。すると男はなにもしなかったかのように、どこかに消えた……。

俺はすぐコインを拾い、コンビニに向かった。俺はそこでおにぎりを買おうと、ブラックホールみたいに、吸い込んでいるように食べた。

夢の中でも・・・(後書き)

久しぶりに書いたZE

恐怖再び

おにぎりを食べて空腹を満たすと、立ち上がり歩き始めた。だが行く場所もないから歩いてても意味がない。どこにも泊まる場所もない。

でも俺は泊まる場所を探すように、歩いた。

こんなことをしてる間に夜になってしまった……。

俺は人があんまり通らない道のと真ん中で疲れ切った体をたおして大の字になって転がった。

夜空を見渡すとやけに今日は星や月が綺麗だ。

俺は感動しながら星や月を眺めていた。すると月の真ん中辺りが急に人のような影が現れた。

でも人にはない翼がはえている。俺は、不思議に思い睨みつけるように、月を見ていた。

するとその影がだんだんこっちに向かって来る。俺は思い出してしまった。

『恐怖』を！　そして体をすばやくおこして、睨みつけながら走って逃げる用意をしていた。

『シュツ』あの怪物の影が消えた。俺は頭をかきながら首をかしげた。

するとまた何かの視線を感じた。

『ドグツ』なにか腹に衝撃を感じた。そして吹き飛ばされ、樹にぶつかった。

咳き込みながら立ち上がると目の前に翼のはえた、怪物が……。だが体がいつもなら震えるのに震えなかった。慣れてしまったのか……。慣れてしまつというところがおかしい。まずこんな怪物普通はみないから……。

『お前……。俺の仲間殺したでしょ？』

意味が分からない。怪物が突然質問してきた。

『俺が殺せるわけないだろ！ お前らみたいに怪物じゃないんだから』

俺は腹を抱えながら質問に答える。

『嘘をついてはいけない。俺らを倒すほどの力があるなら、抹殺をしなければ。とジーク様の命令が だから、抹殺そう死んでもらおう』

ジーク？ ジーク様ということは、こいつらよりも上がいるということか・・・

そんなことを思っている間にもう攻撃の態勢に移っている。

その怪物は、手のひらを開き手のひらから黒い球体が・・・これは夢で出てきたのと同じだ・・・

夢で見たが、この攻撃力はハンパない。

俺は腹を抱えながら逃げた。

『じゃあね』

『俺 お前の言うことを聞くから・・・ 助けしてくれ・・・ 神！』
後ろに振り返ってみると、黒い球体が消えていた。俺は安心して崩れ落ちた。

『神？ もしかして・・・』

怪物の目つきが変わった。

『クソ！ ならもっと早く抹殺しなければ・・・ 過去のあやまち
は繰り返さないんだよ！』

今度は爪をのびし、高速でこっちに接近してきた。

俺は立ち上がるうとしたが、腹が痛く少し意識が朦朧としている。

爪が俺の腹に・・・これをくらったら、本当に死んでしまう・・・

『ドロン』

神の本当の姿

急に爆発音のような音がした。あまりの音のデカさに驚き、耳を手でふさいだ。

目の前は砂ぼこりで、前が見えない。数十秒たつと砂ぼこりが消えてきた。

前に動物の影が・・・砂ぼこりが完璧に消えると、うさぎの姿が・・・

『いたたたた・・・。お前にこんな力があつたなんて・・・やっぱり抹殺を・・・』

あの怪物完璧勘違いしている。俺がこんな力持ってたなら、最初から戦うし・・・

『ちよつと待てよ！俺お前なんか攻撃できんし、触りたくもない』

『だまれ！まあ死んでもらうんだからもう言うことはないかい？』

俺は大きく息を吸った。

『バーカ。俺は死なん』

『そうか・・・じゃあね』

すると再び手を開いて、黒い球体を出している。

だが・・・怪物が崩れ落ちた。腹を抱えて。よく見ると刀で

切ったような切り傷が・・・

そしてそこから大量の血が出ている。

『なっなんで・・・ハア・・・ハア どうやって・・・』

急に怪物の表情が変わった。すごく驚いていて、固まっている。

目線は俺ではなく、

俺の上を見ている。目線を追うと、俺の上に人間が・・・浮か

んでいる！！

黒髪でツンツン頭で目の色は赤く、黒いコートを着た男が・・・

『お前・・・もしかして神の生き残りか・・・ そんな訳がない・・・
すぐさまジーク様に報告しなければ・・・ あんな人間は後回
しだ!!』

怪物は腹を抱え翼を広げ飛ぼうとした。だが・・・

『逃げんなよ カス』

黒髪の男は、ムカつくセリフを言うと、地上に降りて、地に手を当てた。

『さあ 落ちろ』

すると地に穴ができた。 黒髪の男の影が穴に変わった。 その穴は

勝手に動き怪物の下に

穴が移動した。

『苦しむがいい』

すると怪物が穴の中に落下していった。 そして影が黒髪のもとに戻った。

『大丈夫か？ 言うこと聞いてくれるって言ったよな・・・。』

こいつ神なのか？ うさぎだった覚えがあるが・・・。

俺はあぐらをかいて座った。

『俺は神だ。 うさぎは、俺が変化していただけだからな あのこ
とは忘れる!!』

この上から目線の言い方にイラツキ、舌打ちをした。

『まあいいや んでどうしたら帰れるんだ?』

腹を抱えながら聞いた。 すると?

特訓の道へ・・・

『・・・アツハハハハ』

神と名乗るやつは、口を大きく開けて笑った。俺は恥ずかしくなり顔を隠すように目をこすった。

『何笑ってんだよ』 『君はとうぶん帰れないね』

神は笑みを浮かべながら、言った。 だけど俺は驚き、そして驚きと共に悲しくなった。

『何で帰れないんだよ・・・。 お前神なんだろ！ 俺をもとの世界に帰らせてくれよ！』

『それはできない。 お前はあの怪物たちに連れてこられたんだろ・・・。 だから俺にはもとの世界に返す方法は分かん』

これを聞いたとたん、 目から涙が出て頬をつたって地に落ちた。

俺は強気だが、本当は涙もろく、怖がり。 これを隠すために、強気なだけ。

『まあお前は殺されるから・・・ 殺されたくないのなら、俺の仲間になってくれ・・・。 あの怪物どもを俺と一緒に倒そう。 そうすれば、もとの世界に戻るかもしれない』

俺は、俺はこんな早くに死にたくない。 そして・・・もとの世界に戻りたい！！

俺は立ち上がり大きく息をすって『俺はお前の仲間になってやるよ。』

『そうか・・・』 神は、笑みを浮かべ俺のことを見つめていた。

『では、君みたいなのがただの邪魔・・・ だからこれからは特訓だな！！』

『えっ・・・』 俺は頭の中が真っ白になった。 こいつと特訓・・・ 戦う前に死んじゃうよ・・・。

あんな強い攻撃？ みたいなのできないし・・・

『まあ まずは別の場所に行こう』 『へ？』

すると神に手をつかまれ、怪物が落ちた影の穴に二人一緒に落ちた行った。

目を開けるとさっきとはまったくちがう世界のような感じ。まるで天国。　すごく白い。

そして建物が城とか、変わった家ばかり・・・　とにかくまぶしい。

俺は目を細くし、辺りを見回した。　神がない。

目が痒くなり目をこすった。　そして目を開けると・・・　別の場所に移動した。

さっきみた城より10倍はでかい。　高さ500メートルぐらいだ。『ウツ』胸に何か刺さった。　胸を見るとでかい針が刺さっている。

針を抜くと、血がダラダラと出てきた。

『動くな！！　勝手なことはこのミリーちゃまが許さんじょ』

特訓開始

・・・誰もいない・・・

何かを感じ、振り返って見るとさっきのでかい針がものすごい勢いでこっちに向かって来る。

『シュツ』すると目の前に神が出てきた。そして針をつかんだ。

『やめる！！ミリー　こいつは俺らの仲間だ　これが俺の言った仲間だ』

『マジでちゆか？　こんな弱そうな男が？』

ああああああああ　むかつくー　ここにはムカつくやつしかおらんのか！！

その前に胸が痛いんですけど・・・
するとだれかが現れた。

女の子で身長は140cmぐらい、ピンク色の長い髪で星のピンどめ、白い白衣のような服を着ている
瞳はピンク色で輝いている。

『こいつは、俺の仲間のミリーだ。　お前の特訓をもらう。』

あはははは　こんな女の子に、特訓してもらうのか。　あの針もどうせ武器だろう。

『お前！！　今私のこと弱いと思ったデちゆか？　フフツ』

すごい余裕な顔で笑われた。　あんな女に負けてたまるか！！　俺は胸を押さえながら、準備体操をした。

『あああ・・・　特訓してやるうじやないか・・・　その前にこの胸の傷を治してくれ』

俺は真剣にたのんだ。

『ああ　治してほしいのか・・・　まあいつか治るだろう・・・
頑張つて治るように祈るんだな。』

ここは地獄か！！　祈るって・・・だれに祈るんだよ。　神が目の前にいるのに、祈るとか・・・　お前らホントに神なのか？

『ああ 俺らは神だ』 『そうでちゅよ』

ああああ マジでうざいんですけど!!

『では特訓にうつろう。』

すると 急にフィールドが変わった。 何もなただの草原に俺と

ミリーという神がいるだけ……

あの神はいない。 所謂いえばあの神の名前ってなんだろう？

そんなことを思っていると、急にミリーが拳で俺の腹を殴った。

吹き飛ばされた。 胸が痛い…… 腹も痛い。

『ちよつとまでよ…… まだ開始も言われてないのに』

『何言ってるんだよ!! さっき特訓にうつるといっただろ。 甘く

見るな』

ちよつとセコイ。 まあホントだからな。 ていうかあの神どこから

言ってるんだ? どこかに隠れてんのかな? そう思うと俺は傷傷の体

をおこして立ち上がった。

『勝つてやる。』 俺はそう言葉を告げ、戦闘態勢にはいった。

でも…… 戦うっていったって、神とどうやって戦うんだ?

『戦うんだ!! お前の全力をみせる!!』

あい 分かりました!!

俺はちなみにスポーツは…… 不得意です!!

するとミリーが飛びながら正面から飛んできた。 それを、しゃが

んでなんとかかわして、

後ろを振り返りパンチを一発入れてやろうと思った。

振り返ると…… だれもいない……

『ドン』 後頭部にかなづちで殴られたような、衝撃が走った。

俺は崩れ落ちて、まるまった。 頭がずきずきして痛い。 もう意

識が飛びそうだ。

特訓開始（後書き）

感想書いてチヨ
ー
W
W
W

弱いからダメ(前書き)

久しぶりに書きました。

ぜひ読んでください

弱いからダメ

俺はなんとか立ち上がり、ミリーという神を探した。

だがいない。俺は、ぐるっと辺りを見回した。でもどこにもいない。

『やめだ！ やめにしよう！ こんなんじゃ、ミリーの勝ちに決まっている』

いやいやいや まだわかんないじゃん。

『何が、わかんないじゃん！ 自分で分かっているのか？ お前フラフラしてるぞ』

マジですか。俺、本当に知らなかったんだけど。 そう思った瞬間、気が遠くなった。

そして全体の力がぬけて、倒れてしまった。

ここは・・・ 目を開けると、天井にはシャンデリアが。 そして、俺はベットで寝ているということしか

分らない。俺はまだ少し痛い頭を、抱えて起き上がろうとした。

『うぎゃあああ イッテー』

俺は体全体に、激痛がはしった。それと同時に、ベットから落ちてしまった。 そしてその着地のせいでさらに激痛が・・・

『コンコン』 ノックが鳴った。 『入るぞ』 これはあの神の声だ。

すると扉があいて、外からあの神が入ってきた。

『体の具合はどうだ？』 『あああ・・・ 大丈夫だけど痛いぜ！』

『ごめん。それ治せるんだけど・・・』

・・・治せるのかい！ 『じゃあ治してくれよ。』

『なんでだ？』

痛いからだよー！ マジム力つく 俺はかなり頭のなかでは、血の流れが速くなっていますよ、

その怒りをこらえて、顔にはださないようになっています。

でも、むりだつたらしく

『おいおいおいおい！ 痛いから治して欲しいんだろっが！ このカス』

『カス・・・』すると神が急に首をつかんできた。俺は治してくれるのかと思い、安心して

気をぬいていた。すると神が首を絞めてきた。思いつきり。

俺は苦しくて、なかなかでない声を精一杯だして・・・

『す・・・いま・・・せえ・・・ん』といった

『これから、カスといつたら、しばくからな！』

そついうと手を離してくれた。

俺は大きく息を吸った。俺は少し咳き込みながら言った。

『なんで治してくれないんだ？』

霧からギヤオ

『えっ… だって治したら、強くなんないと思って強くなんないっていうか動けない…』

『では…特訓に移ろう』 までまで動けないって…』

『…グッ』

急に風景が変わった。なんと霧に包まれた、林のど真ん中に寝ていた。

『ガサツ…』 草が動いた。

『グルルルウウ…ギヤアアオオ』

草木から、紫色と黒の縞模様で、目が金色。そして尾の先が赤色のまるで、

闇にのつとられた、虎のような感じだった。

『さあこの大きな怪物を倒してみる。お前なら3%の確立で倒せるはずだ』

低っっっ！ ていうかまず動けん。

『ギヤアオ』

鋭いつめで斬りつけてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1146/>

もう一つの世界は・・・

2010年10月13日20時59分発行